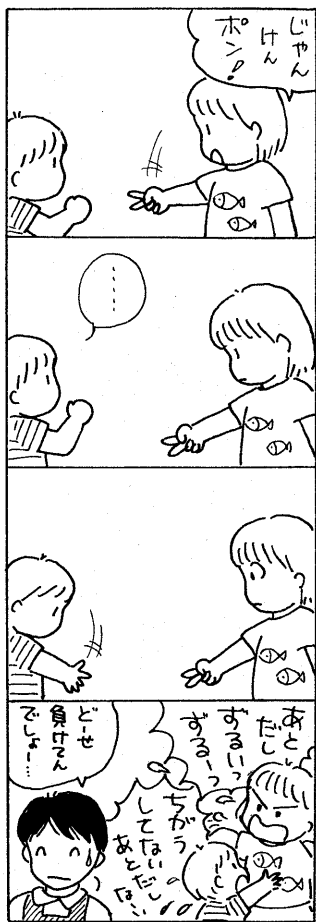


ある日の育児日記から

(59)

佐藤 和代



ある日の夕方、近所のSちゃんが来ました。玄関でSちゃんと話をしていた敬は、「Sちゃん、家出してきたんだってさー」とガハガハ笑い出しました。ちょっと、笑ってる場合? 六歳だって悩みはあるでしょ、デリカシーないわね。

Sちゃんは、理由を聞いても「もうお母さんはお母さんじゃないの」と言うだけ。圭と有は「Sちゃんお泊まりね!」とはしゃいでます。

とにかく子供部屋に押し込み、こっそりSちゃんの家に通話しました。「あ、やっぱりそこにいる? 迎えにいきます」;急いで来たお母さんを

見てびっくり。ロングヘアだったのに、ぼささり切ってショートになっています。「そうなのよ。Sったら、それが気に入らなくて、ヘソ曲げてるのよ」;なるほど。さらさらの長い髪、すてきだったものね。Sちゃんのがこれの髪、あこがれのお母さんだったのね。

まだムスツとしていたSちゃんに、「お母さんの髪ステキ! すっごく似合う!」なんて言いながら、私もつい笑いがこみあげ;あ、いけない。

デリカシーはどうした。

Sちゃんほしぶふ帰っていきます。お母さんほどうやうやしてSちゃんを説得するのやら。「あこがれのお母さん」でいるのも大変ね、と思いつつ見送りしました。



圭も髪をのばして長く、カットするときは一苦労。